ネア王家の勃興よりヘロデ王家の樹立に至る政治史、第四篇 The Roman Yoke はイエルザレム滅亡に至る迄の政治史、第五篇は After the Fall of Jerusalem とは題されてゐるが寧ろ、Josephus の作品そのものゝ評論或は其史料の吟味であり、殊に第十六章は新約聖書との關係を論じ、特に聖ルカ福音書が其知識を Josephus に負うてゐるとの Krenkel の說を反駁して其然らざる事を主張してゐる。

全般的に見て、著者は Josephus に對する從來一般の偏見を努めて排して、穩健に歷史家としての彼の立場を理解せん事を求め、彼が今や文化世界の中から忘れ去られようとした猶太敎の傳說及び律法を新時代の中に如何に生かし、如何に適應せしめんとしたかに就て、寧ろ同情を以て辯護してゐる。然し H. G. Wells 氏が『世界史大系』の中に Josephus を呼んで 'a maddeningly patriotic writer' と評したに駁して、Josephus が猶太の過去の歷史に對して抱いた關心と猶太の制度に對して捧げた讃美とのみを理由として、あの祖國と羅馬との乾坤一擲の戰役に奉公しなかつた彼を愛國者と呼ぶ事の謂れなきを擧げ、『Of the better side of Judaism, except in the reply to 'Apion', Josephus has little to say. At any rate, the last part of the 'Antiquities' is invaluable for the history of an obscure period of the history of Israel; but for all our gratitude due to Josephus for composing it, it is hard to feel admiration for the man himself. (p. 258)』とまで極言してゐる。惟ふにあの矛盾に富んだ Josephus の眞相を判ずるに當つては著者自ら大いなる矛盾と當惑に直面した事と思はれる。史實を述ぶるに當つては Josephus の傳ふる所を可及的に其儘に容認してゐる樣であるが從來年紀上或は文獻學的に疑義を生んでゐる諸點に就ては概ね、conventional な通說を何等註記する事なしに採用してゐる。

引用された原文は、Loeb 版の Dr. Thackeray. の譯を用ひてゐるが、同版未刊の、'Antiquities' のみは著者自身の譯文と思はれ、二・三、William Whiston の『標準譯』を參照してゐる。(Society for Promoting Christian Knowledge; London, 1930. 發行) 〔水川〕

## ●東洋史上より見たる日本上古史研究 一 (耶馬臺國論考)

橋本 增吉著

耶馬臺國の論爭は明治大正を通じてわが邦史學界に於ける最も大きいものゝ一つであつた。魏志倭人傳に見える二三の地名を我國古代のそれのいづれに比定するかは魏志そのものゝ立場からは寧ろ比較的些末の事であるにかゝはらず、之をわが國古代の實情を記すものとして記紀の所傳に立優つてその價値を認めようとするとき、その所謂耶馬臺國が果して今の九州の地にあつたか、將た畿內にあつたかの判定は實にわが國古代史の全貌を殆ど根柢から相違せしめるほどの大問題となるのである。されば、この論爭に際しては國史、東洋史、考古學その他關係の學問に亘つて著名の學者は大方之に關係して各その見る所を發

表し、あらゆる可能なる解釋は既に一應提出し盡されたかの觀があるのである。然もその結果はなほ遂に唯一の結論には到達しなかつた。蓋し問題の困難は魏志の記載そのものゝ中に數々の矛盾を含み、且その記すところ論者によつて古今不變と考へられてゐる我國の地形的關係と相齟齬するものあるが故である。一時考古學的遺物遺跡の研究はこの問題に對して別途解決の方法を與へるかの如くに見え、人々は文獻と考古學との所謂綜合的研究の結果に期待したのであつたが事實はたゞ問題を一層紛糾に導いたに過ぎなかつた。われ／＼は今や寧ろその始めに歸つて問題そのものゝ在所を探れ、その方法に省みて論爭に先立つて既に問題自身の有する一定の限界を明かにすべき時機に立至つてゐるのではなからうか。新に橋本增吉氏によつて公にされた論考は、われ／＼に對してまづその書がわれ／＼の研究史上　有つ歷史的なる意味を思はしめるものがある。

氏は最も早くよりこの問題に關與された一人であり、永き論爭の歷史を通じて絕えず自他の論據を吟味しつゝ終始所謂九州說を主張し來り、今この大著によつて既往一切の論說を吟味して獨自の立場から最後の斷案を下さんとせられるものゝ如くである。從つて今われ／＼の問題は之を舊來の他の諸々の說と同列に置いて相互の優劣を品評することではなくして、專らその說の據つて立つ所の根據、その論理でなければならぬ。何よりもよろこばしいことは、氏が從來の論者の屢〻敢へてしたところの月は日の誤なるべし、南とあるは東を意味するならん等といふが如き私意の推定を極力斥けて、與へられた資料の文意を能ふる限りその文字、文脈のまゝに正しく解しようと努めたことである。それが爲には併しながら最も困難なる里程記事と日程記事との矛盾、方向に關する疑問等に何等かの尤な解決が與へられなければならない。氏は魏志の記載と翰苑所引の魏略の記事との異同を手がかりとし更に其他尙多數同種の事例に勘へて之を編者がその據るところの史料に基いて文を爲すに當つての不用意不精密に歸しその間自ら彼自らの時代の知識の混淆するに至つたものであらうと鮮してゐる。もとより既に同種の解釋は嚮に喜田博士等によつてもなされて居り、その着眼は必ずしも氏獨自のものとは言ひ難いが、然もその論を進めるに當つては頗る詳密細緻、加ふるに官名、人名、戶數、習俗、生業その他凡そ事の倭人傳中に見ゆる限に亘つて逐一吟味を遂げあらゆる可能なる解釋を擧げ盡してその所論の尨大實に菊判六百餘頁に及んでゐる。更に氏の既往に發表された關係論文にして續いて出版を約されたものを加ふれば正に一千四五百頁にも達するであらう。今それらの所論の當否を一々こゝに吟味することは到底出來ないことであるが（若しも教授と同じ方法を以て之を爲さうならば恐くは更にまた數千頁の論著を必要とするに至るであらう。）偶〻通讀に際して得たところの感想を率直に語ることを許されるならば、筆者は考證といふことの限界に想到らざるを得ないのである。成程氏は從來の多くの考證家のやうに或る場合には記事をそのまゝにして、耶馬臺國の位置を動か

し、或る場合には耶馬臺國の位置を定めておいて記事の方を改變し、以て都合よき結論を導き出さんとすること、恰も光源と物體とを交ゝ動かしつゝ壁面上に己が欲する投影を求めんとするが如きことを爲さなかつたとしても、なほその屢ゝ圖點を附して特に力説せられるところが畢竟然かあることが支那學者の通弊であるといひ、或はまた然か考ふるに至るは當に人情自然のことゝ推考せられる、といふにあるを思へばそれによつて得られた結論は少くとも氏の庶幾せられた如き唯一不變の眞實たるには遠いものと言はねばならぬであらう。固より筆者は總じてかゝる考證の意味を徒に輕視し、それが爲になされた氏の大いなる努力に對して十分なる敬意を拂ふことを惜しむものではないが、然もまた新しい歴史學、はかくの如き問題を姑く問ふことなくして(現象學者の所謂括弧に入れて)おのづからそれ自身に固有なる課題を有してゐるのではないかと思ふのである。

(東京大岡山書店發行、定價六・〇〇)

## ●大和上代寺院志

保井芳太郎著

この書は、大和國中に於、大略和銅以前に創建された寺院、飛鳥、向原、橘等その後の今に續くと否とを問はず凡て五十五、その一つ〳〵に就いてその遺趾を勘へ、沿革を叙し、その遺物に就いて述べたもので著者が專らその家藏に係る古瓦の優秀なるコレクションを基礎とし、嚮に大津京趾並に紫樂宮趾等の研究によつて其名を知られた肥後和男氏の隱れた助力に俟つて大成せるもの、全體として考察の中心は主に伽藍の配置と時代によるその興廢にあるものゝ如くである。これ前者には礎石が、後者には瓦當がその根據としてあり、二つのものを合せてよく千年の昔の結構を復原しその盛衰の跡を辿りうべしとされるからであらう。叙述は概ね簡明に、多く論辯を須ゐず、考證の煩を避けて、直接圖に就いて論旨を得せしめんことを期してゐる。縱ひその推定には時に或は單に一個の私見に過ぎぬと思はるゝものがあるとしても、そは本來著者蒐藏の古瓦を通じて觀た寺院志たるによつて恕せらるべく、われ〳〵は寧ろその世に普通の瓦譜と異り、すべての資料を一貫せる組織の中に取込みよく一定の目的の下に仕へしめてゐる點をとるべきであると思ふ。その各寺院別に出土の古瓦を整理したことは逆にまた古瓦そのものゝ年代その樣式の實年代の上に有つ意味を嚴密ならしめたものとして卷頭濱田博士の序文にも見える如く美術考古學の上に重要なる寄與をなすものといふべく、かくも多數の遺趾に就いてよく一應の考察を遂げ失はれたる過去をわれ〳〵の眼前に恢復して與れた努力は何よりも多とせられなければならぬであらう。秀れたコレクションは夫自身既にサムシングであるが、それを基としその上に一の學問を造上げることは更に別個の事に屬する。筆者はその圖版を通じて保井氏の立派な蒐集に驚くと共に終始氏を助けてこの良著を完成せしめた肥後氏の大きい努力に對して十分なる敬意を捧げたいと思ふ。(四六倍版本文一五四頁、圖版六七、二百部限定、大和史學會發行、定價一〇・〇〇)

## ●綜合日本佛教史　橋川　正著

昨秋不慮の病の爲に齡漸く不惑を過ぎた許で亡くなつた大谷大學教授橋川正氏の遺稿が此度氏の同僚にして生前親交のあつた德重淺吉氏並に門弟達の手によつて公刊されるに至つた。これは著者の大學に於ける講案であるが、生前既にその發表を企圖し、その外遊以前より稿を起して歸朝後なほ匆忙の間筆を擱かなかつたものであるといふ。不幸にしてその稿未だ全く成るに及ばずして急逝されたことは何よりも著者自身の最も不本意とされた所であらうが、今校訂者にその人を得てかく整つた形を與へられるに至つたことは洵に以て瞑すべきことであらうと思ふ。われ／＼は同じく繁忙の中にあつて煩しい校訂の勞を執られた德重氏以下の諸氏にまづ衷心感謝の意を表したい。

著者橋川氏の學問・その史風に就いては卷頭に氏の恩師西田博士の略敍されたものがありまた舊著「日本佛教文化史之研究」「日本佛教と社會事業」その他によつて既に人の知るところであるから、今茲に繰返すことをしない。たゞ本書通讀に際しての一二の所感を述べるならば、第一にそれが著者の講案であることの爲に極めて心易い感じを與へることである。實に行文の平易であるばかりでなく、書物そのものを氣輕く手にすることが出來讀むに從つてその内容が素直に頭に入つて行くことである。些細なことながら用ひられた活字や組み方の美しさなども之を助けてゐるのであらう。次には同じくそれが講案・あることから、特に嶄新な所説や卓拔の創見といふが如きものは見られないとしても、世の通説として一應何人も知つておくべき程のことはいづれも要領よくその記述の中に取入れられてあることである。かやうなことはたゞ著者のやうな老練な教師にして始めてよくしうることであらう。第三には、それに關聯して、それ／＼の場所に於いてその事に關係ある事項が便宜關説されて更に進んだ研究への緒が與へられてゐることである。それが爲に全體の敍述の體裁に於いて時に繁簡その比を失すると思はれるやうなところもないではないが、それは學校の講義に於ては普通のことゝして、われ／＼は寧ろその實際上の便宜をうれしく思ふ。たとへばその所々に挿入されてゐる關係論文の註記の如きもそれによつて裨益を得るのは唯初學者のみではないであらう。なほ附錄として添へられた神道と佛教、佛教と日本精神、佛教と藝術の三編は挿入の圖版と相俟つて本文の所説を補ふところが多い。（本文五九八頁、圖版一六、東京目黒書店發行、定價六・〇〇）「以上　柴田」

## ●日本史籍名著解題　松本彦次郎著

嚢に「鎌倉時代に於ける宗教改革の問題」「日本宗教運動」等獨自の見解に富む論文を公にせられたる著者が、今回現代史學大系の叢書の一として、本書を執筆せられ學界に提供せられたるは誠に喜ばしき事と云はねばならない。

著者は本書の節を分つて（一）辭と記錄の二表現形（二）表現と